

足尾銅山を訪問して

旧年の10月下旬の日曜日、連合、JC、産別プロパー有志の集まり「ジャンタクラブ」の特別研修会で足尾銅山を訪問した。全電線傘下の古河グループ労連日光地区の田中議長に休みの日にもかかわらず、ご案内いただいた。ちよと、私たちが乗った「わたらせ渓谷鉄道」の電車は2両編成で紅葉見物に訪れた家族連れで混んでいた。まだ、紅葉には少し早かったが、ちらほら黄や赤にお色直しをした樹木が目を楽しませてくれた。

最初に訪れたのは、通洞駅から歩いて5分くらいのところにある「足尾歴史館」だ。館長を務める長井一夫さんから、館内の説明を受けた。歴史館自体がNPOによる運営になっており、展示物もすべて住民関係者からの寄託形式をとっている。館長の長井さんは、足尾町の出身で生命保険会社を定年退職した後、少年時代から住んでいた足尾の町に貢献しようと足尾銅山を世界遺産に登録すべく情熱を傾けている。2005年にオープンした歴史館には、かつて繁栄した足尾銅山の歴史を物語る写真や資料、当時の品々が数多く集められている。

現在は、約3000人の足尾町も、足尾銅山が最盛期だった頃は、この山間の町に実に約3万8000人ももの住民が住んでいたとのこと。長井館長は、少年時代の足尾町の様子を「とにかく人がたくさんいて活気があった。映画館も6軒くらいあり、その一つは2000人も収容できた。サーカスが来た

り、お芝居や相撲も足尾巡業が毎年あり、盛り上がりがあった。当時、町は豊かで、車も最新の外車が入っていた」と熱く語っていた。

足尾銅山は、近代日本の礎を築く大きな役割を担っていた。「当時の日本でも最初に最新の製錬技術や採掘技術が取り入れられた銅山だった。足尾鉱毒事件などのイメージが強いが、実は銅の製錬時に発生する硫酸をガスとして空気中に出すのではなく、銅と硫酸をきちんと分離・貯蔵する無公害製錬装置を日本で最初に導入した工場である。日本の銅の4割を生産し、その大半を海外へ輸出して外貨獲得の一翼を担っていた。こうした近代日本における足尾の光の部分がほとんど知られていなかったの、それを発信する場として、この歴史館をオープンさせた」とのことだ。

1906年(明治39年)当時の足尾銅山の鉱夫の賃金は、平均日給が72・5銭となっていた。

同年の重工業大企業の賃金と比較すると、三菱長崎造船所の平均日給が53・9銭、八幡製鉄所の平均日給が57・3銭であるから、鉱夫の賃金が非常に高かったことがわかる。なぜ、それほど高かったのか、足尾銅山の坑道跡を見学してわかっ

た。江戸時代から約400年間にわたって掘り開いた坑道の長さの総延長は1234kmに達する。これは東京から博多間の距離に匹敵する。無数に張り巡らされた坑道は、まるでアリの巣のような感じだった。明治時代、ランプの薄明かりの中、狭い坑道の中で一日中、銅を掘り続けることは、閉所恐怖症である私には考えるだけで息が詰まりそうになった。坑内で働く人たちは、宿命とも言われる「珪肺病」(よろけ)に悩まされていた。珪肺病とは坑内で銅を掘るときに出る粉塵を吸い込み肺がおかされる不治の病のこと。10年鉱夫を続けると肺をやられて寿命を縮めると言われた。江戸時代から対策が求められていたが、全国的に労働者の要求として取り上げられたのは大正14(1925)年のことで、実際に国が労災病と認定し、労働者の生活保障をすることができるようになったのはそれから30年もたってからのことだった。

足尾銅山の労働運動で特徴的なことは、明治40(1907)年の大争議だった。この争議は、労働者の賃金や待遇改善を内容とした24項目の要求をきつかけに起こった。その後も、闘争は大正8、9、10年そして13年の4回にわたり行われたが、いずれも待遇改善と首切反対の要求が掲げられた。こうした中、大正10(1925)年5月に足尾で第2回メーデーが盛大に開かれた。これは日本の銅山で開かれた最初のメーデーでもあった。

それから、坑道見学で江戸時代の展示場を見て、なるほどと思ったことは、「お足」の由来についてだ。お金には足がはえているので、すぐにどこかに行ってしまうことから、お金のことを『お足』と言うのだと物心ついた頃から思っていた。時代劇の銭形平次でも知られる貨幣、寛永通宝(一文銭)は、江戸末期まで日本各地の銅山で作られていたが、そのうち足尾で作られた寛永通宝には全て裏に「足」の字が刻まれ、『足字銭』と呼ばれていた。約2億枚が足尾銅山で製造されたとのこと。このため、ほとんどの銭に『足』の字が刻まれていることから、江戸時代、お金のことを『お足』と呼ぶようになったとのことだ。

足尾銅山を後にして、さらに山奥に車で15分ほど入った国民宿舎かじか荘に宿泊し、庚申の湯につかり、皆で懇親を深めた。途中、松木溪谷の山間は、大分色つき始めていた。

(渡辺美知夫・記)



足尾精錬所跡地



足尾銅山通洞入口